

稲山会 通信

第 3 号

2000年2月1日発行

発行人：新井昭夫 発行所：稲門山の会事務局 TEL03-3367-3723 FAX03-3367-8150 ©稲門山の会1998

ご挨拶

OB会代表より

1998年から新しい体制でOB会の運営を始めてから早2年が経ちました。この間、新年会、総会、スキーの会、山行会、有志の会、名簿の改訂、通信の発行などを行って参りました。微力ではありますが、OB会の活性化に寄与できたのではないかと考えております。これも皆様のご支援があったからこそと感謝しております。会費も順調に集まり始め、大きなイベントを行うことも可能になりました。皆様のご提案を頂き、多彩な活動を行っていきたくと考えております。

OB会が単なる郷愁の場に終わることなく、会員はもとよりその家族、友人までを含めた新たな出会いの場になることを念願しております。そのためには、皆様のご協力が欠かせません。より一層のご支援をお願いいたします。

(大国恒雄 S.33)

会員近況報告

2000年新年会返信はがきより

- ・現役の学生諸君は人数はそろっているのですが、相変わらず山登りというよりアウトドアという感じの活動しかしていません。残念ながら、それが会の「伝統」として定着してしまったようです。(池岡義孝先生 顧問)
- ・心臓バイパス手術の成果は、無事に10か月経過したので回復を確信し、体力増強に力を入れています。再び、北米の山々やアンデスの山々を登る目標を立てています。(納見明德 S.34)
- ・元気で再就職を勤めています。ぼちぼちですが山歩きをやっています。(山口昌之 S.36)
- ・会社を卒業して1年たちました。昨年は北海道から九州までいろいろな山を歩きました。元気で毎日が日曜日を楽しんでいます。(恩田和夫 S.36)
- ・昨秋、日大山岳部OBの仲間に加わり、ヒマラヤトレッキングに行ってきました。ポカラ湖畔からの朝日を浴びた岩と雪のマチャブチャリの姿に感激しました。(佐藤嘉紘 S.37)
- ・昨年会社を退職し、全くの自由人となり、未だ残る人生を模索中です。これから追われることもなく駆けることもなく、マイペースで自然に溶け込んでゆく積もりです。(石川俊彌 S.37)
- ・毎月山に登っています。久住連山、由布鶴見と1500～1800m級の手頃な山がありますので重宝しています。是非一度皆様も九州まで足を伸ばして草山の良さを満喫してほしいと思います。(広瀬舜一 S.38)
- ・昨年の夏、ちょっと大病をしました。その前に、行きたかった利尻岳に行ってきました。年に1～2回の山登りですが、楽しくやっております。(小島俊一 S.41)
- ・昨年は妻と二人で5月に鳳凰三山、7～8月に槍ヶ岳、10月に穂高と登ってきました。今年もまたいろいろと挑戦してみようと思います。(森逸岳 S.43)
- ・松下電器でパソコンの企画をしています。山はさっぱりです。(米山不器 S.54)
- ・先日、ド快晴の日に勤務先のビルから近郊の山のさらに奥に雪山(南ア?)が見え感動しました。(徳永義孝 S.54)
- ・1歳5か月の長男の名前は嶺(れい)といいます。ベビー用の背負子も買ったし、あとは雪解けを待つばかりとなりました。ジョークで始めたフリークライミングも昨年は草コンペに出るまでになりました。(藤井徹也 S.58)
- ・2000年の元旦を3000mの剣山頂で迎え、思い出深い正月となりました。(内山正一 S.60)
- ・昨年は三本槍岳、大戸岳、穂高、富士山、朝日連峰、荒海山に登りました。11月に結婚しました。(荒井英明 H.5)

山と山の会に関して

1999年最後の山は、12月23日、女房を連れ、会社の仲間と奥多摩・三頭山をあるいてきた。快晴で、雪の富士山を見ながらの快適な山歩き。富士山に魅せられたら、富嶽三十六景を描きたくなる気持ちも理解できる。富士山は美しい。

毎年、山の会の先輩の太郎良さん、宮前さん、迫田さん、田辺さん、小谷さん等と2月の日光・戰場ヶ原でのクロスカントリーで山歩きを開始。昨年は巻機山、蝶ヶ岳、加賀白山が主だった所。全て天候に恵まれた。

若い時（昭和46年山の会卒）、夢中で山に登っていた頃には、見えなかったものが、今になって見えてくるような気がしている。歩ける事が嬉しいし、大袈裟かも知れないが、一本一本の木や、小さな花や、冷たい岩や、澄んだ空気が有難く尊く思える。白山・室堂での満天の星。蝶ヶからの夕暮れの影絵のような槍・穂の稜線。見ていると、ドーンと腰が据わってきて落ち着く。日常の仕事の難事や、気をもんだ事が、いかにも小さく思えてきて、すっきりして、気が大きく持てる。山の中に居る事は良いものだ。

さて、本や雑誌を読んでも、つつい、山関係の記事に目が行く。

(1) 12月の朝日新聞の天声人語。エヴェレストのマロリー「見つかった亡骸は純白の彫像のように輝いている。頂を目指す強い意志が死後も消えずに結晶したような思いさえする。」

ナガパルバットのヘルマン・プール「人食い山と呼ばれた同峰に劇的な単独登頂を果たし、頂上にピッケルを残した。」

谷川岳の大岩壁に挑んだ上田哲農「困難に立ち向かう登山家の意志をゴッホの種まく人の画の中に見た。」学生時代には、こんな本を、良く夢中で読んでいた。

他方、(2)「山頂に立つより、峠に立つのが好きだ。何かを極めるより、見晴らしの良い、上にまだ何かが残されている状態の方が、居心地が良いし、落ち着く。生涯、次に登る山を求めて、つまり、人生の目的を定めて生きて行くのは、挑戦者としては美しいけれど、随分疲れる生き方だ。」(日経新聞より)

そして、また(3)「私にとって、山とは、レジャーや気晴らしではない。畏怖の対象であり、人生の師であり、己の内面と対話する得難い機会である。したがって、まず体力を鍛え、衣食住の全てを背に担ぎ、自分の足で、自分の眼力だけで登りきるのがまっとうだと考えている。」(同日経より) などなど、沢山、昨年も切り抜きが溜まった。

山の写真の整理と共に、切り抜きの整理も楽しみな仕事のひとつ。山とは、計画を立て、調べて準備して、体調を整え、そして、山に入って、下りてきて、体を休めて、行動を整理して、実に沢山の楽しみがある。準備の為には、打ち合わせをしなくてはならない。何もなしでの打ち合わせもない。当然、酒が入る。下りてきたら、やはり反省会が必要。酒の無い反省会では反省にならない。いつになっても、これでは止められない。それ程魅力に富んだ行動。リベラル・アーツ(総合的な教養)か。

そこで、以下のような、山の会の、OBを中心にした活動が出きればと思う。昔の、私が入会する前の会は(私の時代は全員でも10数名)、大所帯の会で、生物部とか地歴部、気象部、厚生部のいろいろな活動があった。今、もう一度、中高年が中心になって、例えば、世代別の部、地域別の部、目的別の部(写真、スケッチ、花、温泉、紀行文等)をつくり、それぞれの活動を報告しあって、盛り上げる。勿論、その中でも、本来の脈々と受け継がれ、引き継がれた「アルピニズム」の精神を、周到に保ち、盛り上がりの機に常に備えておく。継続した活動が絶対に必要。折角ここまで来ているのだから。会報3号への原稿を書きながら、そんな事を考えた。

(新井昭夫 S.45)

春の八甲田山に遊ぶ 1999

五月二日(日)晴、時々曇り

夜明けと共に黒石に着いた。東京から走りっぱなしで来た一行は、薄雲の中に雪を頂いた岩木山を見つけると、とたんに眠気が吹きとんだ感じだった。今回の目的は八甲田山、酸ヶ湯温泉である。

登るにつれ雪がだんだん多くなり、まわりをすっかり雪に囲まれている酸ヶ湯温泉に着いたときには、玄関の扉も開いておらず静かなたたずまいを見せていた。

もう何時間かここは登山客、スキーヤー、観光客、湯治客、などで喧噪をきわめることであろう。玄関の左手にはしっかりと雪のついた大きな崖のような斜面が朝日に映えて、まぶしい。正面から眺めているせいか斜面のきつさに一行は呆然として見つめていた。

宿で仮眠をとったあと環状道路をバスで八甲田ロープウェー駅に行き乗ることにした。約10分の空中散歩のち田茂菴山頂に達する。快晴とまではいえないまでもそこその天気である。かすかながら津軽、下北半島が眺められ、岩木山が雲の上につき出て見える。足慣らしをかね最初はやさしいコースを下ることにする。雪の量は申し分なし。普通は山頂駅横の急斜面を下るのだが、ここは下らずに斜面上部を前岳方面に向いや、下りぎみに左から上ってくる沢状の上部に降り立つ、あとは急斜面の下部をまくかちで滑り、傾斜のや、ゆるくなったところで急斜面のコースと合流。ここまでは小さなブッシュをさけながらの滑走で問題なし。途中右手に銅像ルートを進め、段々と樹木が現われ、林間滑走の観を呈してくる、太い木の根本回りの雪のくぼみが春の山を思わせるに十分な深みをもっている、雪上にこまかい木々の枝、木肌のくずなどがあちこちのにつており、雪面は波形を見せている。風の甘いかおりがほ、を過ぎていく、五キロほどのコースだが春山の雰囲気は満喫出来た。もう一本ダイレクトに下るコースを降りたあと今日の最終、宮様コースを酸ヶ湯温泉まで滑って帰ることにする。田茂菴岳より東に広いならかな斜面を進むと小さな鞍部に着く。そのま、直進して主稜線を登れば赤倉岳、井戸岳、八甲田大岳へと連なる峰々である。我々は、これらを左手に見ながら毛無岱へと降りる。傾斜のゆるい広い雪原を滑るのだが、途中いくつかの小沢を越えるため下り一方ではなく、沢状の手前から出来るだけ勢いをつけて対岸の出来るだけ上部に滑り上がらないと効率が悪く体力を消耗する。

広い台地をスケートイング、斜滑降とかしながら、自由に動き回れる、けっこうおもしろいが見つかる。「まるでクロスカントリーだ」とメンバーの一人があえぎながらつぶやいていた。一ヶ所急なブナ林の斜面を下り、ゆるくなつた斜面をしばらく滑り林をぬけると突然目の前の斜面が無くなった、端まで行くと眼下に酸ヶ湯温泉の屋根が見えた。今朝呆然とながめた崖のような急斜面の上に出たのである。実際にそばに来ると広い。スリバチ状の底目掛けて一気に滑り下る、コース最後のおもいきり飛ばせる所だ、五キロは優に滑っただろう、早く温泉に入りたい。名物の千人風呂で古い時代の息吹きを感じながら今日のつかれをいやし明日にそなえた。

五月三日(月)曇り

天気が心配だ。今日一ぱいもてばよいのだが、外に出るといつ降ってもおかしくないような空模様である。昨日来た小さな鞍部で登山靴に履き替え、スキー靴と板はザックに背負う。けっこうな重さだ。主稜線目指し登り始める、しばらく雪上を歩くと自然に夏道に合流する、稜線上では雪は無くなっていった。上から下りてくる登山者とすれちがったりして、呼吸が激しくなってくるころ、ぽっかりと展望の開けたピークに達した、1521メートルでまわりはハイ松帯になっていた。うしろをふりかえると田茂菴岳が低くなり右下には昨日滑った毛無岱の雪原が広がっている。このピークが赤倉岳かと思ったらもう一投足先であった。赤倉岳を越えほんの少し下った所で夏道を左に入り東側の斜面に出てハイ松と雪の境にザックを下す。ここからの景観は雄大で、八甲田特有の円錐形の山々、井戸岳、八甲田大岳、小岳、高田大岳、雛岳、などが指呼の間に見わたせ、それらにかこまれた広大な斜面には豊富な残雪がその裾を延ばしている。赤倉岳東側斜面が今回のメインコースで田代平に至る全長6.3キロの箒場岱ルートである。昼食をとりいざ出発。

頂上直下の広い斜面はや、急ではあるが実に気持がよい。パラレル、ボーゲン、大回り、小回り、ギルランデ、何でも有りの滑走を楽しみながら大斜面を下り切ると沢を越す、対岸を又長い斜滑降で進み台地に至りいくつか窪地をこしているうちに樹林帯に入る。これ又気持の良い林間で、夏のように葉が茂ってなく見通しがよく明るい、時々横に出ている枝で顔を払われそうにな



りひやりとするが、木々の間を右に左にとどこでも滑って行ける。長い林間を滑っているうちに木の間ごしにちらりと建物が見えてきた、田代平にある三軒の茶屋であった。

一つのピークに登り、そこに広大な斜面あり、谷あり、台地あり、樹林あり、そして若干のルートファインディングありの変化に富んだ滑走は、ゲレンデでは得られない満足感と充実感が得られるものであった。

八甲田山の地形は比較的やさしいが、春山とはいえ、やはり大きな自然のなかでは何が起こるか分からない。パーティーの力量、レベルを考えそれに合ったコースを選ぶべきで、しかも経験あるリーダーがいればより安全な行動を楽しめるであろう。我々はそういう意味では安全かつ大いに楽しむことが出来たのである。

春の八甲田、良かったですね。

(上田訓央 S.33)

・会計報告（1999年1月～1999年12月）

摘要	収入	支出	残高
(収入)			
繰越金（預金・現金の合計）	574,721		
会費納入	600,000		
銀行利息	383		
カンパ等	96,200		
(支出)			
慶弔費		69,927	
新年会関係費（案内状送付等）		45,305	
稲山会通信 No.2 発行費		5,600	
稲山会通信 No.2 発送費		20,500	
振込手数料		378	
合計			1,129,594
	遭難対策基金（1999年12月現在）		1,083,921

・会費納入のお願い

年会費 6000 円の納入を宜しくお願いいたします。

銀行 第一勧業銀行 沼袋支店 普通預金 1218236 稲門山の会 幹事 関根聰一郎

郵便局 記号10160 番号51307151

名前 稲門山の会 代表者 関根聰一郎

住所 中野区沼袋2丁目5番12号

編集後記

この1年半で3回の発行、半年に1回というスローペースですが、何とか3号をお届けできることとなりました。面白く充実した会報をつくりたいと理想は高く、いろいろとアイデアはあるのですが、仕事の合間をぬっての会報づくり、なかなか思うようにはいかないのが現状です。ただせっかく始めた会報ですから、これからも長く続けていきたいと思っています。そのためにも是非会員の皆様の協力を頂きたいと思います。山行記録、山の写真、あるいは紙面へのご提案、何でも結構ですから、事務局の方へお寄せ下さい。よろしく申し上げます。